

~~~~~  
論 説  
~~~~~

構成主義的グラウンデッド・セオリー・
アプローチを用いた分析事例
——二つの視点・二つの理論——*

末 田 清 子**

抱 井 尚 子***

沖潮(原田)満里子****

1. はじめに

抱井(2015)は、代表的な質的研究法であるグラウンデッド・セオリー法 (Grounded Theory Approach 以降 GTA) の誕生と発展の歴史的背景を概観し、構成主義的 GTA (Charmaz, 2006, 2014) の特徴についてまとめている。

本稿では、抱井(2015)を基に、構成主義的 GTA の研究目的や手順を踏まえて実際のデータを構成主義的 GTA でどのように分析するかを示す。具体的には、抱井・末田・沖潮(2015)で示したように、末田および沖潮が、データと初期コードおよび焦点化コードを共有し、どのように異なるグラウンデッド・セオリーに到達するかを提示する。そのことにより、同じデータを分析しても、それぞれの研究者が異なる視点をもつことによって、産出されるグラウンデッド・セオリーがどのように異なるかを示すことができよう。

* 本稿は抱井・末田・沖潮が 2015 年 3 月 22 日に日本発達心理学会第 26 回大会にて行ったチュートリアルの内容に基づいている。

** 青山学院大学国際政治経済学部・教授

*** 青山学院大学国際政治経済学部・教授

**** 湘北短期大学・専任講師

2. 構成主義的 GTA

2.1. 構成主義的 GTA の特徴

グレーザーとスト劳斯 (Glaser & Strauss, 1967) が創始したオリジナル版 GTA を含む客観主義的 GTA は、量的研究に対して劣位にあるとみなされていた質的研究法の「客観性」を担保すべく、データ分析の手順を可視化することに注意を向けた。よって、客観主義的 GTA を用いた研究は、変数や、出来事や行為が起きる条件を特定し、検証可能な仮説を生成することを目的とする。データそれ自体は社会的現実の投影とみなされ、誰が分析しても同じ結果になることがこのアプローチでは重要になる。このアプローチにおいて、問いは「事実」を投影するものであり、本稿が扱うデータに照らし合わせるならば、「パートナーに障がい¹⁾のあるきょうだい²⁾のことを伝えるのはなぜ大切なのか？」というような問いである。

それに対し、構成主義的 GTA は、「研究参加者の暗黙の語りや行為の意味を探究し、解釈すること」(抱井, 2015, pp. 59–60) を目的とする。データそのものが社会的現実を映し出したものとは無批判に考えない。データそのものは、研究者と研究参加者の関係性、研究者とデータとの距離等に左右され、状況依存的である。また、構成主義的 GTA では、誰が分析しても同じ結果になることなどあり得ず、研究者がどのような視点で分析するかによって異なる結果が得られるのは当然だと考える。つまり、データや分析は研究者と研究参加者、状況等の相互作用によって構築されたものだと考えられている。構成主義的 GTA のアプローチからすると、「パートナーに障がいのあるきょうだいのことを伝えるのはどのような経験か？」というような問いが立ち上がる。

2.2. 構成主義的 GTA の手順

2.1. で述べたとおり、構成主義的 GTA は研究参加者の語りや行為に可能な

1) 内閣府 (2014) によると、表記についての世論は分かれるが、世論調査でもっとも許容度の高かった「障がい」(35.5%) をここでは用いる。

2) 本稿では「兄弟姉妹」を「きょうだい」と表記する。

限り近づき、その意味世界を理解することを目的とする。よって、客観主義的 GTA においては様々な分析の道具が盛り込まれているのに対して、構成主義的 GTA の手続きはとてもシンプルである。なぜなら、分析の道具やテクニックは、それを体得することに注意が向けられすぎると、ときには研究参加者の意味世界に深く没入することの妨げになり得るからである。

以下にデータ分析のプロセスを簡単に記す。

① 初期コード

最初にデータを意味のある一区切りごとに分け(切片化)、その区切りに名前を付与していく。名前はその区切りを端的に表すものであり、ときには研究参加者が使ったことばそのものを名前として付与することもある³⁾。客観的 GTA において研究参加者の語りをその語りのコンテキストから外して「客観視」するために行うのに対して、構成主義的 GTA では研究参加者の意味世界に深く没入するために切片化を行う。また、コード化をする際に、トピックではなくプロセス、行為、意味に注目し、動詞または動名詞でコードを付けることが望ましいとされている。

② 焦点化コード

次に、データとデータ、コードとコード、データとコードを継続的に比較し、初期コードを並び変えたりして、意味の近いコードを固め、より抽象度の高いコード名を付与していく。この第二段階のコードを焦点化コードと呼ぶ。

焦点化コードを精緻化し、暫定的な理論的カテゴリーへと発展させるために、さらに文献収集したり、同じ研究参加者に別の場面でインタビューしたり、別の研究参加者を対象にインタビューや観察を行う。これを理論的サンプリングと呼ぶ。理論的サンプリングを究極までつきつめて、これ以上インタビューや観察を行うべき対象者⁴⁾がいないというレベルまでデータを収集することを理

3) 研究参加者の使ったことばそのものをコードの名にすることをインビボコード (in vivo codes) といい、研究参加者の意味世界を保持するのに有効である (Charmaz, 2014)。

4) この場合、研究参加者は「数」ではなく、パターンを満たす要素で考える。例えば、本稿では、パートナーに「障がい」のあるきょうだいのことを話す経験に関わ

論的飽和と呼ぶ。

③ 理論的カテゴリー

焦点化コードをさらに精緻化させて、理論的カテゴリーを構築する。この過程で、コードに関する記述や、アイデアや、疑問など気づいたことをメモ書きする。もちろん、メモ書きは分析のどのレベルにおいても行うものであるが、理論的カテゴリーとしてコードをまとめ、次のカテゴリー関連図に到達させるうえで、とくに重要である。

④ カテゴリー関連図・ストーリー

カテゴリー間の関係性を把握したら、それをカテゴリー関連図として描く。ただし、カテゴリー関連図は描く研究者と描かない研究者がおり（Charmaz, 2006, 2014）、必ずしも必須ではない⁵⁾。そしてその図に沿ってストーリーを執筆していく。構成主義的 GTA における理論とは、「世界の解釈的描写」（抱井, 2015, p. 63）であり、したがってストーリーは「当該研究への読者の想像的参加を促すような」（Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳 2008, p. 157）読み手に感動をあたえ共感を呼ぶものである。

3. データ

本稿では、障がい者のきょうだいを生きるとはどのようなことなのかを探究する目的で、沖潮が収集したデータの一部を用いる。2. においても示したとおり、「パートナーに障がいのあるきょうだいのことを伝えるのは、どのような経験か？」を研究設問とする。研究参加者はあきこ⁶⁾で、データ収集当時、20代前半の大学院生であり、知的障がいのある姉（まや）と健常者の姉との三姉妹の末っ子である。ケンゴというパートナーがいて、データはケンゴに姉（まや）のことを伝える経験についての語りである。一方、インタビュアーはまりこ（表

るデータを扱うが、研究参加者の年齢に着目する場合は、20代、30代、40代などまんべんなく年代を網羅しているようにデータを収集する。

5) 本稿においても、末田はカテゴリー関連図を示しているが、沖潮はカテゴリー関連図を描かずにストーリーへと移行している。

6) あきこ、あきこの姉のまやさん、そしてパートナーのケンゴはすべて仮名である。

1 では私) であり、データ収集当時は 20 代後半の大学院生であった。専門は臨床心理学である。まりこは長女で、知的障がいと身体障がいのある妹がいる。

データの収集は共同構築的インタビューおよび観察であり、本稿で用いるデータは 6 回目のインタビューであった。通常のインタビューでは、研究参加者の語りのみを切片化する。しかし、今回のインタビューが共同構築的インタビューであることから、「あきこ」と「まりこ」の双方の語りをデータ分析の対象とする。

4. では末田が 2.2. の構成主義的 GTA の実施手順を踏まえて、分析の仕方を段階的に示していく。5. では沖潮が、末田の初期コードおよび焦点化コードを使って、別のストーリーにどのように到達するかを示す。

4. 末田の分析

4.1. 初期コード

表 1: 初期コードの例

インタビュー・データ	初期コード・番号 ⁷⁾
あきこ: 何か、前々からこの人には話したいなって思ってたって言ったじゃん。	この人に話したいと思っていた 1
私: うんうんうん。	
あきこ: で、ただ一つ決めてたのは、何か、こうなったら言うとか、このときに言うとか先に決めないで流れで言おうっていうのだけ決めてて、だから、	自然な流れのなかの告白 2
だから、何かいつになるか分かんないなって自分で思ってたんだけど、何かたまたま旅行に行ったときに……。	たまたま旅行のとき 3
私: 伊豆?	伊豆 4
あきこ: うん。何か、帰りの——今ちょうど 2 番目の姉ちゃんが結婚でもめてて。	2 番目の姉の結婚でもめていた頃 5
私: あら。どうなるか。	

7) 初期コードに番号を付したのは、再現性のためであり、これは末田の手法である。

あきこ： うん。で、ちょうどその私が伊豆行ってる間にバタバタしてて。家ではね。で、親からメールが来てたりしてたんだけど。	私が伊豆にいたときの家で のバタバタ 6
で、その話をちょっとしたときに彼の方から、「こういう話のとき、1番目のお姉ちゃんの話って全く出てこないよね」って言われて、	1番目の姉が話題にならないと指摘される 7
「まるで家にずっと居続けるのが常に決まってる人っていうか、ずっとそこから移動しない人みたいにでも思われてるの？」みたいなふうに言われてて、あ、確かにそう思ってるなと思って。	家に居続ける人という固定概念 8
私： ああ、うん。何か結婚とかはせずに……。	結婚せずに家に居続ける存在 9
あきこ： うん、うん。何か鋭いとは思ってたんだけど。	ケンゴの感性の鋭さ 10
で、「そういう存在なの？」みたいなふうに言われて、「ある種の珍獣みたいな感じ？」みたいに言われたから、「まあ、そんな感じ」って笑いながら言って、	「珍獣」扱いして「笑う」 11
で、何か、そのときに何か、また適当に言っちゃうよりも言っちゃった方がいいかなと思って、	姉のことを言ってしまったほうがよい
「まあ、っていうかね」っていうふうに、「知的障がいがあるんだよ」って言ったら、	姉の知的障がいを告白 12
「ああ、そうなんだ」ってなって、	彼の受容 13
何か自分の中で彼は、「知的障がい者とかに対して自分では差別がないと思ってるけど、もし、知らずに言葉の端々でそういう何か私が気になるようなことをぼろっと言っちゃったりしたらごめんね」っていうふうに言って。何で。何で。	彼の知らず知らずの知的障がい者への差別発言の可能性への謝罪 14
私： 何か…… (少し涙ぐむ)。	優しさが誘う涙 15
あきこ： 私がもらい泣きしちゃうよ。逆。	優しさにもらい泣き 16
私： 優しいなと思って。	彼は優しい 17
あきこ： うん。「たらごめんね」っていうふうに言われて、それは何か後々、実はこうなんだと言われた人全員が思う不安だろうなと思って。	告白された側の不安 18

構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析事例

何か、自分が知的障がい者の家族が目の前にいるとは知らずにそういうことを言ってしまったかもしれないという不安は。それを抱かせてしまうだろうなと思ったのね、実際言ったときに。	知的障がい者への無意識に差別発言してしまうという心配を抱かせる 19
でも、私は今までそういうの全然感じてなかったから、全然大丈夫だし、	私は大丈夫 20
むしろ逆に、もしかしたら私はさ、ずっとそうやって何か知的障がい者、家族なのに健常者家族しか知らないかのように振る舞ってきたから、もうそれで気にならないかもしれない。分かんないんだけど。	健常者の家族しかいないように振る舞う 21
もうそれで気にならないかもしれない。分かんないんだけど。	そう振る舞うと気にならない 22
私：うん？ それは、気にならないって？ あ、自分の中でってこと？	気にならない？ 23
あきこ：そうそうそうそう。もう何か、だって25年間さ……。	長い間なんでもないように振る舞う 24
私：まあ、そういうふうには周囲には言わずして。	周囲に姉の障がいについて直接言わない 25
あきこ：そうそうそう、健常者の（家族しかいない）ふりしてきたわけじゃん。	健常者の家族しかいないようなふりしてきた 26
たら何かこうね、何か小学生のときとかにさ、何か知的障がい者の人を笑う生徒がいたら、一緒にそれを笑わなきゃいけなかったから。	小学生のとき知的障がい者を笑う生徒と笑わなければならなかった 27
そういうのに比べたら全然何も引っかからなかったっていうか。	昔に比べれば引っかからなかった 28
で、それで、うん、何だっけ、うん、「ごめん」って言われて、「そんなの全然ないんだけど、何かちょっと言うの初めてだったから緊張したわ」みたいなこと言ってる。	彼の差別意識は感じず、初めて告白する緊張 29
今思えば何で言うのが初めてだって言ったんだろうかというのがちょっとあるんだけど、	なぜ「初めて」と言った？ 30

<p>やっぱり何か、どこかで言いたいなと思いつつも言えずにきたっていう分、私の中でも初めて言えた人みたいな感じで重み付けがされてしまってるかもしれないというのが今の感じなんだけど。</p>	<p>初めて言えた人としての重み付け 31</p>
--	---------------------------

まず、2.2.の①の初期コード化を行う。表1は、データを初期コード化したものの一部である。ここに示されているとおり、Excelを使用し、左端の列にデータを打ち込み、次の列にコードおよびコード番号を付した。コード番号は、再現性のために付したが、番号自体に意味はなく、また必須のものでもない。また、研究者によっては、右端にデータを置き、左列にコードを付す場合もある⁸⁾。

4.2. 焦点化コード

次に初期コードを比較対照させ、意味の類似したコードを固め、またそのコード群にコード(つまり焦点化コード)を付す作業を進めた。焦点化コードは2.でも説明したとおり、コード群を包括し、初期コードよりは抽象度のレベルは高い。臨床心理学は末田にとって未知の部分が多く、今回の分析ではデータに深く「没入」する意味で、焦点化コードであえてインビボ・コードを用いている部分がある。

焦点化コードの一部を図1に示す。また、全ての初期コードと焦点化コードは付録を参照されたい。

8) Charmaz (2006, 2014) に示された実例はいずれも右端にデータがくる。

構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析事例

1番目の姉が話題にならないと指摘される 7 家に居続ける人という固定概念 8 結婚せずに家に居続ける存在 9 「珍獣」扱いして「笑う」 11 健康者の家族しかいないように振る舞う 21 長い間なんでもないよう振る舞う 24 周囲に姉の障害について直接言わない 25 健康者の家族しかいようなふりしてきた 26 小学生のとき知的障害者を笑う生徒と笑わなければならなかった 27 まや姉の実態をなくす 61 はつきりさせない 62 家族の一員の存在を消してきた経験 95 姉にどこかに出てもらった 96 まや姉の実体を示す 63	姉の存在を消してきた経験
言ってしまった後の後悔 77 相手を信頼しきってないということを認識する 78 言えてない＝信頼していない 79 依存欲求の扉開く 80 自分だけがお腹をみせたことを後悔する 81 「あなたしかいない」 82 ほかに何もできない 83 すべてを掌握されている感じ 84 弱いところをさらけ出したあとの後悔 85 安堵の後の後悔 86	言ってしまったことを後悔する
この人に話したいと思っていた 1 まりちゃん→ミオと段階を踏んだ 118 次は誰でもよかったわけではない 119 誰かにいいなかった。できれば付き合っている人に 105 まりちゃんの次はミオにいいたい 120 友だちに言った 109	誰かに言いたい
自然な流れのなかの告白 2 たまたま旅行のとき 3 伊豆 4 私が伊豆にいたときの家でのパタパタ 6 昔に比べれば引かからなかった 28 たまたま今回この人に言った 106 2番目の姉の結核でもめていた頃 5	自然な流れのなかでの告白
彼の受容 13 お姉ちゃんを含めて受け入れる彼 36 姉のことを知っても離れることも、近づくこともなく、自然に受け入れる 37 今も今後何も変わらない 38 自然に受容された嬉しさ 45 母がやんちゃな弟をもった経験 46 警察沙汰 47 弟を聴いて、引け目を感じていた母 48 結婚前提のつきあいのなかでの父への告白 49 ごく自然に父が受け入れたときの母の嬉しい体験 50 母と同じ経験をしたうれしさ 51 おかんの経験 52 何も変わらないと言われた嬉しさ 53 何も変わらないって言われた嬉しさ 76 いろいろなことに納得した彼 39 偽善的な人ではなく、何も変わらず受け入れてくれる人はいなかった 122 本当に隠していた自分の経験に彼が納得 97	自然に受容される
姉の知的障害を告白 12 姉のことを言ってしまったほうがいい 11 姉のことを告白するデメリットも考えた 59	姉のことを言ってしまったほうがいい
そう振る舞うと気にならない 22 気にならない？ 23	いいように振る舞うと気にならない

図 1：焦点化コードの例

4.3. 焦点化コードから理論的カテゴリーへ

4.3.1. カテゴリー関連図素案

次に焦点化コードを理論的カテゴリーのレベルに引き上げるために、末田はまず仮のカテゴリーを図式化した(図2)。

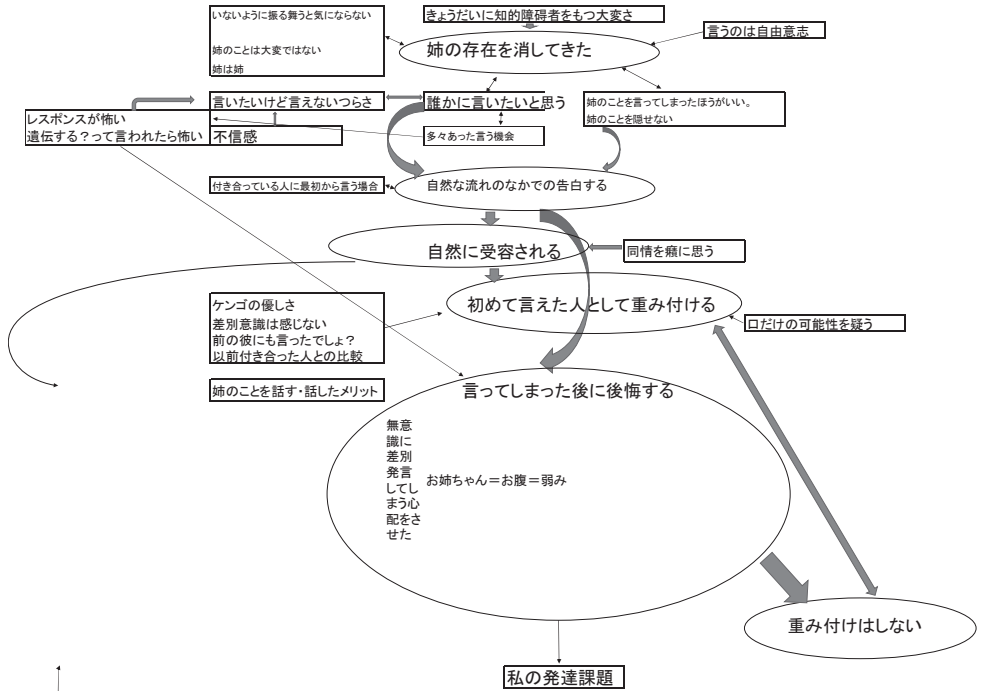


図2: カテゴリー関連図初期ドラフト

4.3.2. 焦点化コードをカテゴリーに導くメモ書き

その仮のカテゴリーそのものについて気づいたことや、カテゴリー間の関係や、疑問点などをメモ書きし続けた。メモ書きのサンプルを以下に示す。

前述のとおり、本稿で扱ったデータは末田が収集したものではなく、また末田は発達心理学の先行研究について熟知しているわけではない。つまり、先入観をもたずにデータに向き合い、データを分析したことになる。

このメモ書きをしては読み返すという作業を続けるなかで、自分にとっては

メモ1: きょうだいに知的障がい者をもつ大変さ

姉の存在を消し、聞かれてもなきものとしてきたことの背景には、「きょうだいに知的障がい者をもつ大変さ」がある。→姉の存在をなきものとし

て周りと接するのは、shame の bypassing である。そしてそれに対して guilt を感じているのでは？

しかし、一方で、いないように振る舞うと姉のことは大変ではなくなるし、もともと自分と姉は別個の人間だと思えて、「気にならなくなる」。平気を装うのも shame の bypassing である。

メモ 2: 言いたいけど言えないつらさ

姉のことはこれ以上隠せないし、言ってしまったほうがよい (acknowledging shame) と思っている。だがいざ言うとなると、相手に対する自分の不信感も感じてしまって、言いたいけど言えなくなってしまう。不信感を感じている自分に対して shame を感じる。

メモ 3: 自然な受容 → あらゆるレベルのシェイムの払拭

姉を含めて受け入れてもらえる。姉に対する shame, それを言えなかった自分も、自分の shame も含めて受け入れてくれる彼。個としてみられたこと。家のスティグマになる弟をもつ母を受け入れた父。その母と同じような経験をもったことの嬉しさ。

メモ 4: 初めて言えた人としての重み付けをする

自然な受容をしてくれたケンゴはこれまで打ち明けようと迷った人たちと比べてとても優しく、打ち明けたのが彼でよかった。そのことに重み付けをしている自分に気づく。しかし、このように特別な存在だとケンゴを位置づけ、重みを付けることにすこし後悔もしているのでは？

メモ 5: 言ってしまったことを後悔する

これは単に言ってしまったから後悔しているのか？ ケンゴを、初めて言えた人として重み付けしたことを後悔しているのでは？ 姉＝お腹＝弱みで、

弱みをみせて相手と対等な立場でおつきあいできなくなってしまうことを shame と感じているのではないか？ 言いたくても言えなかったように、告白の意味づけという大枠のレスポンスは言ったあとでも怖いのではないか？

メモ 6: 重み付けはしない

告白の後に関係性が変わったら、この告白がかなり重みをもってしまう。だから、告白に重み付けをしない方向で行こうと shame を bypassing している。姉に知的障がいがあることは、関係性の変化の要因ではなくても、仲がうまくいかなかったときに、そこに起因させてしまう可能性もある。これは末田（2012）および Sueda（2014）で言われている。

まったく関わりのなかったデータに次第に没入し始めていることに末田⁹⁾は興味を覚えた。そしてこのデータがフェイス（Goffman, 1955, 1967）や、フェイスの情動的側面である shame（シェイム）¹⁰⁾ とプライド（自尊心）¹¹⁾ という理論的枠組みから分析でき、その分析が新たな理論構築につながる感触を得た。

4.4. 理論的カテゴリーに関するメモ書き・カテゴリー関連図

図2のカテゴリー関連図初期ドラフトや4.3.2.で例示したようなメモ書きを繰り返し眺め、仮のカテゴリーを理論的カテゴリーに精緻化した。その段階でのメモ書きの例を以下に示す。最終的には6つの理論的カテゴリーに到達した。

9) 末田は社会学、なかでもシンボリック相互作用論にある程度のバックグラウンドを持っている。

10) シェイムは「自分が拒否されたり否定されたときに伴う感情や、失敗あるいは不十分さを残念に思ったり悔しいと思う気持ちなどを含んでおり（Scheff, 1997）、日本語でいうところの「恥」や「恥ずかしさ」よりも意味の幅が広いと考えられる。」（末田, 2012, p. 34）

11) ここでいうプライドとは、「一個人が自分の置かれた状況や自分自身を心地よく受け入れ自尊心を保っている状態を指す。」（末田, 2012, p. 34）

カテゴリー 1¹²⁾：きょうだいに知的障がい者をもつ大変さ

あきこさんは、姉の存在を心のなかで消し、聞かれてもなきものとしてきた。その背景には、「きょうだいに知的障がい者をもつ大変さ」がある。姉にはそれほど積極的な関わりをもってこなかったが、幼いころから姉のことを口外しないように言われて育ってきた。これは shame (残念、遺憾の念) である。

姉の存在をなきものとして周りの人々と接するのは、あきこさんの心のうちにある shame を bypassing (迂回すること) になる。しかし、そうやって姉の存在をなきものとして暮らすことには、罪悪感 (guilt) もまた感じている。

一方で、姉をいない人のように振る舞っていると、姉のことは気にならなくなる。このように平静を装うのも shame の bypassing である。

カテゴリー 2：言いたいけど言えないつらさ

あきこさんは姉のことはこれ以上隠せないし、言ってしまったほうがいいと思っている。自分のこれまでの shame は正面から受容 (acknowledging) したほうがいいと思う。

ところが、いざ言うとなると、ケンゴに対して自分が不信感をもっていることも認識してしまう。だから、姉のことを言いたいけど、言えなくなってしまうのだ。

そして、ケンゴに不信感を感じてしまう自分自身に対して shame を感じてしまう。

カテゴリー 3：自然な受容＝あらゆるレベルの shame の払拭

ケンゴに姉のことを話したら、ケンゴは自然に受け止めてくれた。それは、姉のことを口外しないように家族に言われてきたことに対する shame、姉のことを隠してきた自分に対する shame、姉のことを言えなかったのに

12) この番号は想起した順位であり、重要度の順位ではない。

平気を装ってきた自分に対する shame, すべてのレベルの shame が受容されたようで嬉しかったあきこさん。あきこさんはあらゆるレベルの shame を払拭されたように感じた。

母が父と結婚する前に、やんちゃな弟のことを含めて父は母を受け入れてくれたという。その母と同じような経験をもてたことはあきこさんにとって嬉しいことだった。

カテゴリー 4: 初めて言えた人としての重み付け

あきこさんにはこれまでも姉のことを打ち明けようと迷った人はいる。しかし、ケンゴはこれまであきこさんが打ち明けようと迷った人たちと比べてとても優しい。ケンゴはこれまで姉のことを言わなかったあきこさんを受け入れるだけでなく、ケンゴが知らず知らずあきこさんに差別的な発言をしてなかったかどうかを振り返るような人であった。

また、言った後のケンゴのレスポンスは知的障がいに対して無理解を露呈するものではなかった。

しかし、そのことによってケンゴを特別な存在だと位置づけ、ケンゴの存在に重みを付けることを癪 (shame) に思うあきこさんもいる。

カテゴリー 5: 言ってしまった後の後悔

あきこさんは言ってしまったことを後悔しているのか? 必ずしもそうではなく、ケンゴの存在に重み付けをすることによって、あきこさんとケンゴの関係性において平等性が担保されなくなってしまうという shame を感じ始めたのではないだろうか。

姉のことを言ったことは、自分の弱い部分をさらけ出したことになる。弱みをみせると対等な関係になれない可能性がでてくることに shame を感じてしまう。

カテゴリー 6: 重み付けはしない

姉のことを告白した後で、二人の関係性が変わったら、この告白がかなりの重みをもってしまう。また姉のことを告白したケンゴの存在も重みをもってしまうことにあきこさんは気づく。だからこそ、あきこさんは姉のことを告白したことに重み付けをしないし、したくない。

上記のカテゴリーに関するメモを踏まえて、書いたカテゴリー関連図を図 3 に示す。

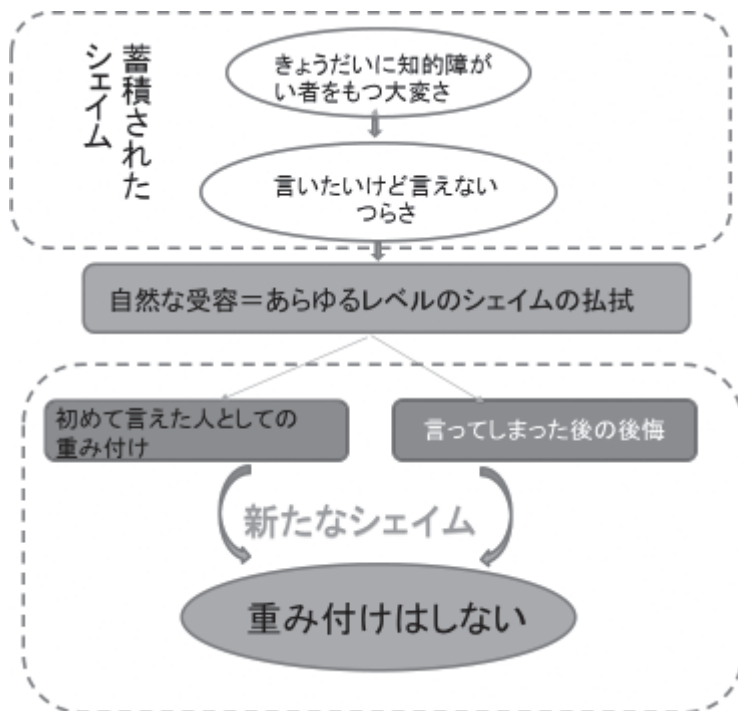


図 3: カテゴリー関連図

4.5. ストーリーライン

図3を基に最終的に、末田は以下のストーリーラインを導いた。

ストーリー（末田版）

パートナーに知的障がいのあるきょうだいのことを伝える経験とは

パートナーに知的障がいのあるきょうだいのことを伝える経験とは、これまで経験してきたシェイムがすべて払拭され、パートナーに全て受容される経験である。きょうだいのことを口外しないように言われたこと、存在なきものとして振る舞ってきた自分に対するシェイム、きょうだいのことを言いたくても言えなかったのに、平静を装ってきた自分に対するシェイム、迂回したすべてのシェイムが払拭され、自分が個として受容された瞬間でもある。

しかし、この経験や、パートナーに重み付けをしてしまうことによって、その経験はあらたなシェイムを生む。つまり、パートナーとは「対等な立場」にいたい、いつも「平等」でありたい当事者にとって、知的障がいのあるきょうだいのことを伝えることは自分の弱さをみせてしまうことになり、これまで享受してきた対等さが損ねられることに対してシェイムを感じることになる。

また今後二人の関係性が変わったら、その変化の要因がこの告白そのものでなくても、そこに帰属させてしまう可能性をはらむ。

このストーリーには、末田の著書 (Sueda, 1999, 末田, 2012, Sueda, 2014) のなかの事例と似た部分がある。ある在日韓国女性に、韓国留学を通して在日韓国人としての自尊心を高めた。しかし、彼女の自尊心が揺らぐ瞬間は、パートナーと過ごすときであるという。パートナーとの仲がうまく行っているときはよいが、何かうまく行かないことがあると、それを自分が在日韓国女性であることにどうしても帰属させてしまうというのだ。これは、あきこさんがこれまで抱えてきたシェイムと軌を一にしている。

一方、このストーリーはシェイムに関わる理論に一石を投じるものであると考えられる。Scheff (1997) は迂回されたシェイムが増幅してより大きな shame になるプロセスを描写してきた。また、シェイムが認識されることによって (acknowledged), 払拭されることを示した。しかし、あるシェイムの払拭と同時に別のシェイムが生まれるというようなダイナミクスについては論じられていない。ここでは、シェイムが「知的障がい者のきょうだいとして」払拭されたのと引き換えに、「一人の女性として」パートナーとの関係性において、自分の対等性が脅かされることにシェイムを感じている様子が映し出されている。

これはシェイムのもつ脆弱性と、可変性について示唆したストーリーであり、今後のシェイム理論構築に寄与すると考えられる。

5. 沖潮の分析

5.1. 焦点化コードから理論的カテゴリーへ

5.1.1. メモ書き

沖潮は末田の初期コードおよび焦点化コードを自身の理論的カテゴリーに引き上げるため、メモ書きを以下に行っている。

メモ 1: 姉の存在を消してきた

- ・これまで姉のことは黙っているようにと両親に言われてきた。
- ・姉が知的障がい者と言ったら遺伝を疑われるかもしれない。
- ・知的障がい者の人を笑う人がいれば一緒に笑ってきた。
- ・あきこさんなの处世術だが、家族の否定につながるつらいことであり、あきこさんにとって大変なこと（一般的な障がい者のきょうだいがいる大変さとの対比）。

メモ 2: 姉の存在を伝えたい

- ・この人には言いたいと思う。
- ・姉のことを話したい時に話せないのはつらいと思うこともある。

- ・ミオ（仮名、あきこさんの友人）に話したのはいい経験だった。
 - ・自分の発達課題でもある。
- 今の自分があるのは姉を含む家族があるから。そんな自分や家族をまずは知ってもらいたいということか？

メモ 3: 反応が怖い

- ・遺伝を疑われたら嫌だ。
- ・同情されるのもいや。
- ・「何も変わらない」のがいい。
- ・反応が怖いからさらっと何事もないかのように言う。
- ・姉の存在を隠すことを助長させる悪循環。どこで断ち切れるか？

メモ 4: 差別発言の可能性を謝る

- ・パートナーは、自覚はないが、無意識に差別発言をしていたら、と謝る。
- ・あきこさんは差別意識は感じたことがないという。
- ・その言葉の裏にはお互い差別意識（もしくは発言）があってもおかしくないと思っている？
- ・差別意識がもともとなかったらそもそも謝るか？
- ・謝る彼・責める私という構図の可能性もある。

メモ 5: 言ってしまったことを後悔する

- ・差別発言をしたかもしれないという不安を抱かせてしまう。
- ・自分自身の手の内を見せてしまった。さらに受容されたことで、今後依存してしまうかもしれない。→対等でない関係性。
- ・相手に本当に初めてなのか疑われた。これは双方にとって後味の悪さを残しているよう。

5.1.2. 理論的サンプリング

表 2: 理論的サンプリング例

パートナーに打ち明けることについて (2 回目のインタビューより)	
あきこ	ミオには言いたいとは思ってるんだけど、たぶんね、あれだと思う、●くん (元パートナー) も大学一緒じゃん、だからなんか先にさ、友達にいっちゃってさ、●くんがそこからへんなリンクで知っちゃうよりは、●くんに言っ、周りにいうみたいな感じにしたいのかもしれない。うん、大学同じ人から広まっちゃうのもやだな、っていうか。
私	まあ、自分が、伝えたいな、っていう人には、自分の口から、直接言いたっていうのが
あきこ	うん、ちょっとあるかもしれない。
私	そうなるとまずは●くんに、っていう感じなのかな。
あきこ	んー、でも別にまずはとも思わないんだけどね、別に結婚するわけじゃないからいいじゃんって思っちゃったりもする。
私	結婚しないとも限ないじゃんね。
あきこ	だったら結婚が決まったときに言えばいいじゃん、とも思うんだけど。
私	うんうんうん、そこは、じゃあなんか、言いたいな、っていう気もあるけど、まあ言わなくてもいいかな、っていうのも、あって。
あきこ	関係ないじゃん。恋愛は1対1じゃん。家、結婚は家同士だけさ。って思ったりもする、けど、まりちゃんみたく言ってる人、言っただけでもそれを理解してくれる、っていうのを聞くと、うらやましい、と思っちゃう。

沖潮は、理論的カテゴリーを精緻化するために、理論的サンプリングを行った。理論的サンプリングは、同じ研究参加者の別時点のデータを、あるいは別の研究参加者からデータを収集することによって行う。今回は沖潮が行った2回目のインタビューのときのデータと比較した。

理論的サンプリングを行い、以下のメモを残した。

メモ 2': 姉の存在を伝えたい

- ・「でもどこかで言いたい」という気持ち。
- ・姉のことを話したい時に話せないのはつらいと思うこともある。

- ・自分の発達課題でもある
→今の自分があるのは姉を含む家族があるから。姉を含めた自分自身、
家族を受け入れて欲しい、知ってほしいからか。
+この人となら結婚してもいい、という思いがでてきている可能性。

5.2. 理論的カテゴリーに関するメモ書き

以上のようなメモ書きで理論的カテゴリーを構築し、それを精緻化する過程で書いたメモを以下に示す。

カテゴリー 1: 姉の存在を消してきた

小さい頃から両親に知的障がいのある姉のことは周囲に口外するなど言われて育ってきたあきこさん。姉の存在を消してきたというのは、あきこさんが想定する一般的な「障がい者が家族にいたことが大変」というのとはまた別の意味での大変さの経験である。一般的な意味では、障がいのある家族のケアの必要性や、障がいのある家族がいることによる日常生活の制限などがある。一方であきこさんは姉とは大学院生になるまで深く関わることはなく、むしろ姉の存在を消してきたために一般的な大変さの経験はあまりないという。しかし周囲や心の中で姉の存在を消してきた経験こそが、自分の家族に対して背を向けた行為でもあり、家族への忠誠心に逆らう行為であり、大変だったことである。

姉の存在を消すということは、存在を消さなかったら起きるであろう現実を想定させる。特にパートナーに姉の存在を打ち明けることには、姉をはじめとする障がい者を否定されるのと同時に、遺伝を疑われるなど自分自身をも否定される可能性も秘められている。否定されることへの怖さや不安が姉の存在を消すことを助長させてきた。

カテゴリー 2: 伝える相手を増やしていく

これまで姉のことを隠してきたが、そうすることは、家族の一員を消すことであり、自らの生い立ちを否定することにもつながってしまう痛みを伴うものである。だからこそ障がいのあるきょうだいのことを打ち明けること、家族のことを隠さないでいることで、自分自身を含める家族を肯定できるようになりたいとも願う。

障がいのあるきょうだいの存在を伝えることは、重大な告白であり、言いたいけど言えないこともあり、相手の反応を怖く思うものでもあるため、伝えるまでに葛藤がある。反応が怖いからなかなか伝えられないという人もいれば、怖いからこそ何事でもないように伝えるという戦略をとる人もいる。もちろん、誰にでも伝えるわけではなく、相手はパートナーに限らず選別する。選別して開示した相手から、受け止められるという良い経験を積み重ねることで開示する対象を広げていく。実際、同じ障がい者のきょうだいである私に、そして友人のミオさんに、と段階を経て姉の存在を打ち明けてきたことが、あきこさんにとって良い経験になっていて、今回のパートナーへの打ち明けにつながっている。

ただし、パートナーに障がいのあるきょうだいの存在を伝えることは、乗り越えるべきひとつの人生の課題となってきょうだいの前に立ちはだかるものでもある。特に結婚を考える相手には隠しているわけにはいかない。そういう観点からも、伝えることは相手が自分にとって重要であるということを示す指標にもなる。しかし、伝えること自体に重み付けはしないほうが今後の関係性のためにはよいだろう。

カテゴリー 3: 差別がテーマとして浮かび上がる

パートナーは、自分には差別意識はないにせよ、自分が無意識に差別発言をした可能性に対して不安を抱く。しかし、差別発言をした可能性を不安に思うことは、一般的に障がい者は差別されている存在であるという意

識をパートナーが暗黙に持ち合わせていることがさらけ出されてしまう。

一方、きょうだいにとってもそれは同じことである。パートナーに謝罪されることで、自分自身も差別の対象になりうるかのような感覚もでてくる。遺伝を疑われたらと不安にもなる。普段は障がいのあるきょうだいの存在を消し、いないように振る舞うことで、一般的な周囲からの差別意識を感じないように自分自身を麻痺させもする。

カテゴリー 4: 言ってしまったことを後悔する

姉が知的障がい者だということは、これまで誰に対しても隠してきたし、もちろんこれまで交際したパートナーにも伝えたことはなかった。あきこさんにとってそれは個人間の交際と家族間の結婚という2人のあり方の違いが理由でもあった。姉のことを伝えることは結婚を意識することにもなり、同時に自らに彼との結婚願望があることを少なからず認識させられるものでもあった。その一方、姉の存在をこれまで伝えていなかったことで、それまで彼を信頼していなかったことも自身の内で露呈される。

姉の存在は家族の秘密であり、「自分のお腹」とあきこさんが表現するように自身の核心部にも相当する。そして打ち明けた以上、自分にはもう何も隠すこともなく、すべてをさらけ出してしまったことになり、自分の弱みも握られた気持ちにもなり、今後対等につきあっていけるのが不安になり、さらにはこの打ち明けを機に自分が彼に依存してしまうのではないかという懸念もある。

彼からは、差別的な発言をこれまでしていた可能性について謝罪された。そこには「謝罪する彼」vs「糾弾する自分」という構図を急に浮かび上がらせてしまい、それも2人の関係性に逆の不平等さを感じさせるものとなった。

後悔をさらに大きくさせたのは、パートナーに「初めて」打ち明けたことを彼に言い、重み付けをしてしまったことである。これは彼の存在が自

分にとって特別であることがさらに誇張された形で彼に伝えることになり、それと同時にさらに自分の弱みを見せることにもなってしまう。一方、パートナーも「初めて」と言われたことに戸惑い、疑うが、それに対して後味の悪さも感じる。重み付けを示すのは、お互いにとって関係性の「重さ」を感じさせてしまう経験となり、特に開示する側にとっては後悔にもつながるものとなる。

言いたい、伝えたいとは思っていたし、彼の受け止め方が自然でとてもよいものであったため、嬉しい経験であった。その一方、打ち明けることをよい経験と捉えてしまうことへの不安や怖さも感じられる。今後誰かに打ち明けることで自身が傷つく経験をしないとは限らない。

5.3. ストーリーライン

5.2. で得られた4つの理論的カテゴリーを基に以下に沖潮版のストーリーラインを提示する。このストーリーラインから、「二重のライフストーリー」（原田・能智, 2012）の新たなバージョンが創発されたことがわかる。

要田（1999）は障がい者の母親は子どもを差別すると同時に差別される存在であると指摘する。きょうだいも同様であるが、母親と異なるのは、この二重性に幼い頃からおそらく無自覚にさらされている点だろう。その分きょうだいへの負担は大きいと考えられる。また、きょう代いは自分自身の人生のみならず、障がいのあるきょう代いの人生も、特にライフコースの選択等においてわけあって生きるという「二重のライフストーリー」（原田・能智, 2012）の新たなバリエーションとも考えられる。

つまり、健常者である自分と障がい者であるきょうだいと分化されるのではなく、自分自身の中に健常者と障がい者という二重の人生が埋め込まれているという異なる二重性が浮かび上がってくる契機となるのである。

ストーリー（沖潮版）

パートナーに知的障がいのあるきょうだいのことを伝える経験とは

お互いの間にこれまで話題に上ることはなかった「障がい者」や「差別」というセンシティブなテーマがぐっと浮かび上がる瞬間となる。それと同時に、自分自身が障がい者を差別する側の障がいのあるきょうだいの存在を消してきた健常者でもあり、遺伝することを疑われるなど、差別される障がい者側の人でもあるという二重性を意識させられる、自分自身の立場の脆弱性が露呈される痛みを伴う経験にもなる。

一方で、これまで存在を隠し、あたかもいないように振る舞ってきた障がいのあるきょうだい、そして自分自身のことも肯定する転機ともなる。パートナー以外の重要な他者に伝え、受け止められるという嬉しい経験を積み重ね、そしてパートナーとの将来をより良いものにしていきたいという気持ちがある時に、乗り越えていくひとつの発達課題として、きょうだいにとって立ちちはだかるものでもある。

6. まとめ

本稿では抱井（2015）に依拠し、構成主義的 GTA の手続きを踏まえ、末田と沖潮が初期コードおよび焦点化コードを共有し、まったく違うグラウンデッド・セオリーに到達する過程を示した。

同じデータと、同じコードを使用しても研究者の視点によって、このようにまったく別の方向性から理論構築がなされることは、構成主義的 GTA の本質である。シャーマズ（Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳, 2008）は、先入観を捨て、データに没入するように向き合うことの大切さを、以下のように述べている。

研究対象となる現象に熱意をもって入り込み、自身を研究の経験に対し
て解放し、導かれるままに従って行くのです。そこには、存在を揺るが
す困惑の淵へとあなたを放り込むような、避けがたい曖昧さが待ち受け

ているかもしれません。それでもなお、あなたが自分の研究に、情熱と好奇心と、開かれた心と、そして関心をもって取り組むのであれば、今までにない経験が結果として起こり、あなたのアイデアが創発されるでしょう (Charmaz, 2006 / 抱井・末田監訳, 2008, p. 198)。

ときとしてそこには不確かさや曖昧さがあるが、それを受容する寛容さが、さらなるアイデアの創発につながるだろう。

引用文献

- Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage. (抱井尚子・末田清子, 監訳 (2008). 『グラウンデッド・セオリーの構築: 社会構成主義からの挑戦』. 京都: ナカニシヤ出版.)
- Charmaz, K. (2014). *Constructing grounded theory* (2nd ed.), London: Sage.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory*. Chicago: Aldine. (後藤隆・水野節夫・大出春江訳 (1996). 『データ対話型理論の発見: 調査からいかに理論をうみだすか』. 東京: 新曜社.)
- Goffman, E. (1955). On face-work: An analysis of ritual elements in social interaction. *Psychiatry*, 18 (3), 213–231.
- Goffman, E. (1967). *Presentation of self in everyday life*. Garden city, NY: Doubleday.
- 原田満里子・能智正博 (2012). 「二重のライフストーリーを生きる——障がい者のきょうだいの語り合いからみえるもの」. 『質的心理学研究』, 11, 26–44.
- 抱井尚子 (2015). 「理論からストーリーへ——構成主義的グラウンデッド・セオリー法とは——」. 『青山政経論集』 94, 43–71.
- 抱井尚子・末田清子・沖潮(原田)満里子 (2015). 「構成主義的なグラウンデッド・セオリーの方法」. 日本発達心理学会第 26 回年次大会チュートリアル. 東京大学福武ラーニングシアター.
- 内閣府 (2014). 「しょうがい」の表記について
http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/zenbun/h1_03_00_02.html#z1_53
(2015 年 8 月 25 日)
- Scheff, T. J. (1997). *Emotions, the social bond, and human reality: Part/whole analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sueda, K. (1999). Negotiating multiple layers of face (*mentsu*) in interpersonal and intercultural communication, *SIETAR, International*, 1, 81–96.
- 末田清子 (2012). 『多面的アイデンティティの調整とフェイス(面子)』. 京都: ナカニシヤ出版.
- Sueda, K. (2014). *Negotiating multiple identities: Shame and pride among Japanese returnees*. Singapore: Springer.
- 要田洋江 (1999). 『障害者差別の社会学——ジェンダー・家族・国家』. 東京: 岩波書店.

付録：初期コードと焦点化コード¹³⁾

この人に話したいと思っていた 1	
まりちゃん→ミオと段階を踏んだ 118	
次は誰でもよかったわけではない 119	
誰かにいいかった、できれば付き合っている人に 105	誰かに言いたいと思う
まりちゃんの次はミオに言いたい 120	
友だちに言った 109	
自然な流れのなかの告白 2	
たまたま旅行のとき 3	
伊豆 4	
私が伊豆にいたときの家でのバタバタ 6	自然な流れのなかで告白する
昔に比べれば引っかけからなかった 28	
たまたま今回この人に言った 106	
2 番目の姉の結婚でもめていた頃 5	
1 番目の姉が話題にならないと指摘される 7	
家に居続ける人という固定概念 8	
結婚せずに家に居続ける存在 9	
「珍獣」扱いして「笑う」 11	
健常者の家族しかいないように振る舞う 21	
長い間なんでもないように振る舞う 24	
周囲に姉の障がいについて直接言わない 25	姉の存在を消してきた経験
健常者の家族しかいないようなふりしてきた 26	

小学生のとき知的障がい者を笑う生徒と笑わなければ
ならなかった 27
まや姉の実態をなくす 61
はっきりさせない 62
家族の一員の存在を消してきた経験 95
姉にどこかに出てもらった 96
まや姉の実体を示す 63

そう振る舞うと気にならない 22
気にならない？ 23

いないように振る舞
うと気にならない

姉の知的障がいを告白 12
姉のことを言ってしまったほうがいい
姉のことを告白するデメリットも考えた 59
姉のことを言ってしまったほうがいい

姉のことを言ってし
まったほうがいい

彼の受容 13
お姉ちゃんを含めて受け入れる彼 36
姉のことを知っても離れることも、近づくこともな
く、自然に受け入れる 37
今も今後も何も変わらない 38
自然に受容された嬉しさ 45
母がやんちゃな弟をもった経験 46
警察沙汰 47
弟を恥じて、引け目を感じていた母 48
結婚前提のつきあいのなかでの父への告白 49

自然に受容される

ごく自然に父が受け入れたときの母の嬉しい体験 50
母と同じ経験をしたうれしさ 51
おかんの経験 52
何も変わらないと言われた嬉しさ 53
何も変わらないって言われた嬉しさ 76
いろいろなことに納得した彼 39
偽善的な人ではなく、何も変わらず受け入れてくれる
人はいなかった 122
本当に隠していた自分の経験に彼が納得 97

彼の知らず知らずの知的障がい者への差別発言の可能性への謝罪 14
告白された側の不安 18
知的障がい者への無意識に差別発言してしまうという
心配を抱かせる 19

無意識に差別発言し
てしまう心配

私は大丈夫 20
彼の差別意識は感じず、初めて告白する緊張 29

差別意識は感じない

ケンゴの鋭さ 10
優しさが誘う涙 15
優しさにもらい泣き 16
彼は優しい 17
言わせる展開になったことを謝る彼 35
はじめて言った人があの人でよかった 103

ケンゴの優しさ

自分の中の疑問 40

これまで言う機会は多々あった 108

多々あった言う機会

初めて言えた人としての重み付け 31

彼に言ったのが初めてだと伝える 32

彼に初めて言ったことに重みを付ける 33

お姉ちゃんが障がい者だってことに重みをつけること
になる 34

なぜ後悔したのか？ それは「はじめて言った人」とい
う重み付け 87

「はじめて言った人」というのが大きい部分 88

(彼が打ち明けた初めての人)それはあっちゃんのなか
で大きなもの 102

初めて言えた人とし
ての重み付けをする

大変だったねと言われたかったわけではない 41

同情されたら癪だったかも 42

同情は癪

姉に関わらなかったのが大変ではなかった 43

姉のことは大変では
ない

姉がいることとの関わりと、姉は姉と思う事 54

姉は姉

きょうだいに知的障がい者をもつ大変さ 44

きょうだいに知的障
がい者をもつ大変さ

まや姉の実体を示すことができた 64
何も変わらないし、話す内容が増えた 60
気にしなくてよい 66
楽になるし、ごまかさなくてよい 67
言わなきゃという切迫感がなくなる 68
話せる題材が増えた嬉しさ？ 65
今の私がいるのは彼に打ち明けたから 55
一歩前進 56
前進？ 57
理解が一歩前進 58

姉のことを話す・話
したメリット

隠してることある？ 69
相手が圧倒されたら…… 71
遺伝するの？ って言われたら怖い 72
遺伝するっていう人いる？ 73
いる。そういわれたらショック 74
知的障がい者を生む可能性を問われたらショック 75

遺伝する？ って言
われたら怖い

言ってしまった後の後悔 77
相手を信頼しきってないということを認識する 78
言えてない＝信頼していない 79
依存欲求の扉開く 80
自分だけがお腹をみせたことへの後悔 81
「あなたしかいない」 82
ほかに何もできない 83
すべてを掌握されている感じ 84

言ってしまった後の
後悔

弱いところをさらけ出したあとの後悔 85

安堵の後の後悔 86

なぜ「初めて」と言った？ 30

前の彼にも言ったでしょ？ という質問 89

真実を打ち明けたのは自分が初めて？ という相手 98

前の彼にも言ったで
しょ？

相手からの質問 90

質問の仕方を変えて聞く 91

彼はまだ家にきていない 92

家にきている人は姉に会っているはず 93

家にきたらもう姉のことを隠せないと思っている 94

姉のことを隠せない

口だけそういっている可能性 99

口だけそういっていると相手が思う可能性 100

口先だけの可能性を
疑う

はじめて言ったことに重み付けしない方向性 104

この人だから言えたという重み付けはしない 107

重み付けはしない

付き合っている人に言うという発達課題 110

ケンゴにいうっていう課題ではない 111

クールに考えようとしている 112

付き合っている？ ケンゴに言う？ という発達課題
113

ケンゴさんである必然性は不確か 121

私の発達課題

今までつきあってきた人には言う必要がなかった 114 以前付き合った人には言わなかった 117	以前付き合った人と の比較
家族内の問題を付き合っている人に言えないつらさ 115 言いたいという気持ちはあったが行動には起こさなかった 116	言いたいけど言えな いつらさ
弱みを握られるという私の不信感 123	不信感
姉の知的障がいはいは自分の弱みだと思っていた自分 124 お腹みせちゃう 125 投影 126 姉のことを言うのは自分のお腹をみせる感じ 127 お姉ちゃん＝お腹 128 家族の秘密をみせる 129 家族の秘密 130 未だに家族の秘密って思っている自分 131	お姉ちゃん＝お腹＝ 弱み
言うか言わないかは自由意思 132 言う言わないは今自由意志 133 小さい頃は言っではいけないこと 134	言うのは自由意志
まりちゃんは今付き合っている人にいつ言ったかも覚えていない 135 最初から何事もないように言う 138	付き合っている人に 最初から言う場合

レスポンスを考えると怖い 136

仲が深化してから言うのと却って怖い 137

(彼が打ち明けた初めての人)そこへのレスポンスなし

101

レスポンスが怖い

13) 注7に同じ。